判斷對象の構成に就て

三宅剛一

一

判斷に於て肯定否定の方面と肯定され否定される對象或は內容の方面とが區別し得ることは何人も拒まないであらう。第一の方面卽ち所謂作用の方面を問題としないとして判斷の對象とは如何なるものであるかを考へる場合に二つの見地があり得ると思ふ。判斷對象をその構成の方面より見る場合とその對象性の基礎を問題とする場合とである。對象について要素とその結合或は關係、質料的なるものと形式的なるものとを區別しその間の關係を考ふが如きは第一の見地であつて、判斷の對象は絕對の當爲であるとか超時間的な意味であるとか乃至實在であるとか云はれるのは第二の見地に屬すると云ひ得るであらう。この二つの方面が何處まで獨立に考へ得るかは問題であらうが、ともかく判斷の對象の如何なるものなるかを明かにしようとする場合にそれの構成が問題となることは明かである。或意味

に於て對象の內面的構成を如何に考へるかはそれの客觀性の基礎を何におくかと云ふ問題の決定に先行す可きものであると云ひ得ると思ふ。知識が判斷の體系であると云ひ得るならば判斷對象の構成を明かにすることは知識の內容そのものの組織構造を明かにすることでなければならない。知識と云ふものを個々の知識の集合であると考へるならば一々の判斷の內容は知識の世界を組織する單位として物質界に於ける原子の如き位置にあると云へる。また、知識は單なる集合ではなく有機的組織を有するものと考へるならば個々の判斷は有機體の細胞に比す可きものとなるであらう。

判斷の對象をその構成の方面から見る場合に、所謂要素とそれの結合或は統一との二つのモメントの關係を如何に考へるかに從つてほぼ次の三通りの見解が成立し得るように思ふ。この分類がどこまで客觀的に妥當であるかは私の確言し得ないところであるが、私の知つて居る論理學者の考方の傾向はこの三種の區別を思ひつかせるのである。

A、要素の獨立性に重きをおいて本來自立的な要素が何等かの「關係」によつて一の複合的對象に結合せられたものと見る。

B、對象は一の統一的全體であつて要素は統一を離れ得ず又統一のモメントも要素の內容によつて限定されると考へるが、然し統一するものと被統一的內容との本質的な二樣性を認めるもの。

C、統一者と被統一者との間に二樣性を認めざるもの、統一は自らの中に多樣を含み多樣は統一によつて多樣としての意味を保つと考へる。もしこの立場に於て二樣性を考へ得るとすれば動的內容の方面の違ひと解する。

この三樣の考方は云ふまでもなく判斷に於ける意識と對象の關係の考方と交錯するのであるがここには問題を限定するために主客關係を度外して對象の構成のみを見ようとするのである。對象そのものの性質がそれ自身として解明されたとするならば主客關係の考方の上に光を與へるところがあるであらう。私はここでは專らAの立場に屬すると思はれる見解を吟味して見ようと思ふのである。それによつて對象の考方の上に我々のとる可き方向だけでも明かにし得ればこの習作の目的は達するのである。

二

對象を主觀の作用から超越的に考へる傾向が素朴的な徹底さを示すところには對象は分析を許すものとなつて來る。對象の意識からの獨立性が强調されればされる程對象に於ける統一の方面が沒却され勝ちとなる。分析によつて確かめ得るところのもの、卽ち要素的なものが唯一の實在的なものと考へられる。かかる傾向の著しく現はれたものの一つとしてラッセルの判斷に關する說を擧げることが出來る。私はここにAの見解の一例としてラッセルをとつて考へてみることとする。

ラッセルによれば判斷は主觀的には確信 belief であるが信ぜられるもの卽ち對象は命題 proposition である。命題は心的なものではなく判斷に於て眞又は僞であるところの當體である。命題は單一なる對象ではなく常に複合的(コムプレックス)である。命題は關係を含むものと然らざるものに分ち得るが普通關係を含まざるものと考へられる主賓命題、存在命題等もある意味で關係を含むと云はなければならない。Socrates is human の如き純粹な主賓命題に於てもソクラテスと humanity との間の一種の關係がイムプライされてゐる。また A is の如き存在命題に於てもAに實有性(ビーイング)がプレディケートされるものと考へなければならない。(B. Rugell, The Principles of Mathematics Vol.1 p.49)「AはBより大なり」の如き命題に於て關係が含まれることは云ふまでもない。

それ故命題の構成に於て關係は最も重要な意義を有する。命題に於ける關係ならざる部分、關係によつて關係せしめられるものをラッセルは名辭(ターム)と呼んでゐる。「Aは Bと異る」と云ふ命題に於てA、Bは名辭相異(ディファレンス)は關係である。然しラッセルはこの區別は名辭の本來の性質に基くのではなく外面的關係による差違にすぎず、と考へるのである。(同上)然し一の命題をとつて見ればその中に於ては關係を現はすものと之によつて關係せしめられるもの、性質を現はすもの(賓辭)と之によつて性質づけられるものとは命題を構成に與る上に重要な相違を有するのである。

命題は名辭と關係とを含むとすればこの二つは命題に於て如何に結合されるのであるか。A differs from Bなる命題の構成要素は A, difference, Bと考へ得るがこの三つを並列したものは原命題を再生せない。それは何によるのであるか、原命題に於ける相違は現實に關係せしめる Actually relate のに反し分析後のそれはA、Bと沒交渉な單なる相違である。更に分析を細ふくして相違のA及Bに對する夫々の關係をも考慮に入れ：is：fromをも分析の上に現はすとする。このことはAとBとが夫々 referent, relatum の關係に立つことであるからこの命題の完全なる構成要素は A, referent, difference, relatum, Bに於て擧げ盡されてゐるのであるが、かかる list of terms が原

命題と同一であり得ないことは明かである。命題は本來一つの統一體（ユニティ）であつて分析がこの統一を破つた以上その構成要素の如何なる列擧によつても原統一を再現し得ないものであると見る外はない。（op. cit. p.49-50）ラッセルは全體（ブオール）と云ふものを集合 aggregate と統一體 unity との二種に別つのであるが統一體としての全體は常に命題である。（同上、一三九頁）集合はそれの單一的構成要素がスペシファイされる時完全にスペシファイされる。統一體に於てはこの事は不可能である。「AはBより大なり」に於けるシンプル、パーツはA、B、「より大なり」であるがこの三つを列擧したのみでは全體は決定されない。何となれば同一の部分より成る相異る二つの全體「AはBより大なり」「BはAより大なり」（A「より大なり」及Bの單なる集合としての全體を入れれば三つとなる）が成立するからである（同、一四〇、一一）

然らば統一體を單なる集合と區別するものは何であるか、それは要素の上にある關係が加はるのであると考へられる。然し關係が加はるといふのは如何なることであるか、關係をも一の單なる部分として加へたのでは依然として集合にすぎない。マイノングは之に加はる關係は項（ジリーデル）に對して正しき關係に立てる關係であると云ふがそれを如何に解す可きであるか。項に關係を添加し更にその關係と各項との

關係を考へれば無限に新たなる關係を生ずるがかかる無限の關係も單に之を集めたのみでは原の複合體の統一を再生し得るものではない。このあるものは一般に普通の意味での構成要素ではない。單に一定の仕方に於て關係せられてあると云ふ事實 the fact of relatedness in a certain way に外ならない。この特殊なる定義し難き一種の統一が複合體の特徴をなすものである。この統一は凡ての命題に屬するものである。命題は眞又は僞であるに反しその構成要素は一般にかかる性質を有せないと云ふ事實はこの場合分析と云ふものの不完全を示すものである。(Russell, Meinog's Theory of Complexes and Assumptions. Mind 1904. P. 210) この一定の仕方に於て關係せられてゐると云ふことは單なる一個の根本的事實として承認し得るのみでそれ以上何等の解明を容れないものであらうか。ラッセルの立場からすれば然りと答ふる外はない。然しこの解明の不可能と云ふことは果して事象そのものの本質によつて然るのであるか、或は複合體の構成に關するある種の見解の必然の結果に過ぎないのではあるまいか。後の可能性は少くとも吟味を要するものである。而してこの結果を生ずる根本の動因として考へられるものは所謂外面的關係の說である。この說によれば若干の名辭がある關係に立つことはそれ等の名辭及關係そのものの內

面的本質によるのではなくただ事實としてかく關係せられてある卽關係は外面的であると云ふのである。關係をかく考へる間は前述の結果は必然である。然し關係の本質に就て他の解釋は不可能であらうか。そしてこの異つた解釋によつて判斷對象の統一と云ふ事實に對して今少し明瞭な洞察を得ることが出來るのではあるまいか。これ等の點を明かにするため一歩溯つて關係とは如何なるものであるか、それは項に對して、また關係を含む全體としての複合體に對して如何なる關係にあるものであるかを考へなければならない。もとより關係の本質と云ふやうな問題がここに解決し盡せるものとは思はないが、所謂外面的關係の說についての疑ひと之に伴う他の解釋の可能性を一瞥しようと思ふのである。

三

外面的關係の說の主張する所は結局次の二點につゞめて考へることが出來るであらう。普通第二の條に擧げたものを以て關係の外面性の意味と考へられてゐるやうであるが第一と第二は相關聯するものと思ふからこの兩方面について考へてみよう。

一、特殊的關係の否定。關係は項の如何によつて變化せず、相異る項の間にも同一なる關係が成立す。

二、タームは關係に入ると然らざるとに係らず又關係の種類の如何に係らず常に不變的な自己同一性を保つ。

第一の點についてラッセルの說は大略次の如くである。「AはBと異る」と云ふ命題に於ける相違は特にABの相違なるか、或はこの相違も相違なる一般概念にすぎないかの二つの場合しかあり得ない。まづある場合の相違 a difference なる概念をとつてこれを一般的相違と、一の相違を他のそれと區別する特殊的性質との複合したるものと考へるとする。相違は單に相違そのものとしては各々の場合に區別はあり得ない。この區別がありとすればそれは夫々の場合に相異る附屬的性質の加はるによると見る外はない。そして各々の場合はその項によつてのみ異なる可きもの故この性質は項に屬するものでなければならない。このものは如何なるものであるか。もしそれが自らは關係ではないとすればそれはAとBとの相違に干與せず從つて之を單なる關係(ペーア レレーション)より分化せしめることは出來ない筈である。いまもしそれがAB間の相違の上に更に加はる可き新たな關係だとすれば、その當然の歸結として

如何なる二項にても一般的相違と特殊的相違とを有すと云ふこととなる。この見解はそれ故に次の二つの見解の綜合である。(a)ABの間に抽象的な一般的相違關係が成立す。(b)二項が相違すればそれは他の如何なる二項によつても分有されざる獨自(ユニーク)な分析す可らざる特殊なる相違關係を有す。この二つは相容れざるものなる故問題は(a)(b)の何れを眞と見る可きかと云ふこととなる。最初に考へた見解はこの二つの折衷にすぎない。ラッセルは特殊的關係の說の論據は命題の統一の概念であると考へる。然し彼によればABの相違が、A、Bに絕對に特有なりとするもA、Bとその特有なるABの相違なる三名辭は「AはBと異なり」と云ふ原命題を再生し得ざることは抽象的一般相違に於けると同樣である。のみならずこの說には他の困難が伴ふ。相違そのものが各々の場合に於て異なるとしてもそれ等が何等か共通のものを有す可きことは明かである。ところで二つの名辭が何物かを共有し得る最一般的な仕方はこの二つが與へられたる名辭に對して同一の關係を有することである。從つて同一關係を有する二名辭なしとすれば何物をも共有し得ざることとなり相異なる相違は相違のインスタンスたり得ないこととなる。これは許す可らざることである。故に特殊的關係は否定さる可きものであつて「AはBと異な

り」と云ふ命題に於て肯定される關係は相違の一般的關係そのものである。卽ち「AはBと異なり」と云ふ時の關係は「CはDと異なり」と云ふ時の關係に嚴密に又數的(ニュメリカリに)に同一である。一般に關係はインスタンスを有せず、それの起り得る凡ての命題に於て同一のものである。(Principles. p. 50–2.)

私はこのラッセルの議論に對して一つの點で疑を挿み得ると思ふ。彼は特殊的關係を許しても命題の統一を再生し得ずと云ふが、ABの相違が眞にAとBとの特殊なる相違であるならばそれはA、B、を離れ得るものではなく何等かの仕方でABを含めるものでなければならない。それ故これを更にA、B、と結合して原命題を再生しようと云ふのは無意義ではあるまいか。嚴密に云へば項が關係に含まれると云ふのは適當ではない。關係は常に項に對する關係であつてそれ自らは項とは區別す可きものである。併し區別し得ると云ふことは分離的存在を意味するとは限らない。關係が特殊的であると云ふのは實は關係と項とを含む全體そのものが特殊的なるものであると云ふことでなければならない。特殊的と考へられた關係の離れ得ないのは直接にはこの全體である。關係とは要素の一全體に統一さるる仕方であるとれば關係が特殊的であると云ふことはこの統一の仕方が特殊的であると云

ふことである。項そのものが單にそれぞれの性質によつて關係を支へ、且項と項との間の關係點が一定すればそこに成立する關係は一義的に決定せられると云ひ得るであらうが、關係點が一定すると云ふことは各々の項そのものの力によるとは考へられない。私はそれにはどうしても各項を含む全體の決定性を豫定しなければならないと思ふ。項と項との間に特殊なる關係が成立するとすればそれはこれ等の項が特殊なる一の統一によつて特殊なる全體に攝取せられる限りに於てのことでなければならない。特殊的關係の項が如何にしてかかる全體と離れ得ざるかは第二の條に就いての考察をまつて解明せらる可きものである。かやうに特殊的關係は常に全體の統一を豫想するものとすれば特殊的關係を考へることは直に全體の統一を考へることであるから特殊的關係によつても全體としての命題の統一を再生し得ないと云ふのは特殊的關係の本質を沒却するものであると云つたのである。以上の議論は特殊的關係がもし許されるとするならばと云ふ假定の上に立つもので特殊的關係そのものの肯定ではない。然し命題の統一と云ふことが抽象的な一般的關係によつては理解し得ないことが論證されればこの假定は定言的なものとなるのである。然しこのことを論證するためには普遍と特殊との關係の問題

に入りこまなくてはならない。ラッセルの立場はどこまでも普遍を抽象的に見るものである。關係の外面性內面性の問題が結局普遍と特殊との關係の問題に歸することはこの問題に思ひ及んだものの均しく認めるところであらう。(cf Bradley, Essays on Truth and Reality. p. 266. 得能氏「關係に就て」哲學雜誌三百十七號七一七頁)。普遍の問題はここに論ずるには私の手に餘るものである。從つて斷定を避けたいと思ふがとにかく外面的關係の說は抽象的普遍の考と關聯するものであると云ふことだけは云ひ得るのである。第二の點に就いて考へて見よう。タームは關係に對して全然インディファレントと考へ得るかと云ふ問題である。關係は關係せられる項の如何によつて規定されると見るのは所謂內面說であるがこれには二つの立場があり得るのである。一は關係は關係せらるる項の內面的狀態にすぎないと見るのであつて他は關係は各々の項そのものの性質ではなく各項を部分とする全體の性質であると考へるのである。ラッセルは前者を關係の單子說 Monadistic theory 後者を關係に關する一元說 Monistic theory と呼んでゐる。この兩者共に關係的命題を主賓命題に還元し得ると云ふ假定の上に立つのである。(Principles, p. 221. f)。私は正しき意味に解せられた所謂一元說のみが關係の本質を明かにするものと思ふ。

單子說によれば「LはMより大なり」と云ふ命題はLが「Mより大なり」と云ふ賓辭を有すると云ふことである。ところでこの賓辭は「より大なり」と「M」とを共に欠ぐ可らざる部分として含むものであつて、單に「より大なり」と云ふことではあり得ない。卽ちMに對するある指示(レフアレンス)を含むのである。然しこの指示の何たるかはこの說によつて知ることは出來ない。Mに對する關係が旣に豫想されてない限りLそのものを如何に分析するも之をMに對してディフィレンシエートする關係は出て來ないのである(ibid)。かやうに「より大なり」と云ふ如き所謂非相稱的(アシムメトリカル)關係に於てのみならず一般的にこの說を破することも出來る。關係の最原始的なものである相違の例をとつても同樣である。「AはBと異る」と云ふのはAが「Bと異る」と云ふ賓辭を有しBが「Aと異る」と云ふ賓辭を有することに外ならずとすれば我々はこの二つの賓辭そのものが異ると考へなければならない。從つて「Aと異る」は更に「Bと異るとは異る」と云ふ賓辭を有しこれが「Aと異るとは異る」と云ふ賓辭と異る可きである。かくて盡くることがない。我々は「Bと異る」を終局と見ることは出來ない。何となればこの句に於ける「異る」とは何の意であるかと問はなければならないからである。「異る」と云ふのは關係から派生された賓辭であつて賓辭から來た關係とは見得ないのである。故

に何等かのダイバーシティがありとすれば實辭の差異に還元し得ざる、卽ち相異る項の性質に基かざるダイバーシティがなければならないのである。ABが相異る內面的狀態を有するためにはABは旣に相異つてゐることを要する。(Russell, On the nature of Truth. Proceedings on the Aristolelian Society. 1906-7. P. 38-9. Principles. P. 447.)° 相異る內面的狀態を認めることが關係の本質をこの狀態にありと見る說を裏切るのである。もしあくまで內面的狀態に執するならばABをその中に含む全體のそれと見なければならないと云ふ。この批評がライプニッツやロッツェの說に對して當てゐるか否かは別とし少くとも次のことだけは認めなければならないと思ふ。項と關係とはどこまでも相關的(コレラティヴ)なものであつて一を他に還元し盡くすことは不可能であらう。もし內面的狀態の歸せらる可きものがかかる意味の「項」に過ぎぬとするならばそれが關係を含むためにはすでに關係が豫想されてあると云ふ非難を許容しなければならないであらう。關係と項とは同時に與へられるものである。AがBと異なると云ふことは孤立的に考へられたAそのものの「中」に求め得可きことではない。Bと異ることなくしてAはAたり得るかと云ふ疑に對してはAがBと異なると云ふ限りに於ては勿論AはBと異なることなくしてAではあり得ないと答へる外はな

い。然しAがBと異なると云ふことが既に單なるA以上のものを豫想してゐると考へなければならない。この「以上のもの」とはAとBとを異なると云ふ關係に於て統一する全體であると云ふことが少くとも考慮に價する一の解釋として許されなければならないと思ふ。

第二の一元說に對するラッセルの非難も所謂非相稱的(アシムメトリアル)關係に關してと一般的立場からと兩方面からなされてゐる。一元說によれば a は b より大なりと云ふのは a b の何れに就いて云はれるのでもなく (ab) なる全體が量の差を含むと云ふとであると云ふが、(ab) は a 及 b に對して相稱的なる故、全體の性質は「a は b より大なり」「b は a より大なり」の二つの場合に於て異る所はない。Principles. p. 225.) と云ふ。私にはこの非難は不可解である。(ab) なる全體は a が b より大なりと云ふ場合とその反對の場合とでは全體としての性質がそれだけ異つてゐる可きではないか。然らずと云ふのは全體と云ふものを抽象的に考へるのによるのではあるまいか。例へば a と、b との全體卽ち and なる關係によつて統一された全體を考へるならば、この全體にとつては a b 間の量的關係は全體としての性質に影響せないと云ひ得るであらう。一歩を進めて a と b とが量の差を有すると云ふ關係に於ける a b の全體もあり得や

うが、これとaはbより大なりと云ふ全體との間には何等かの差異を認めなければなるまい。一般的關係の立場からもラッセルは一元說の支持し難いことを說いてゐるがこれも私には理解に苦しむ論である。しかしここには批評の批評を避けて關係は如何なる意味で全體の性質(プロパティ)と云ひ得るかを見よう。關係の一方の項を引き出して、それ自身として見れば關係をそれの內面的性質に基けることは誤りであると思ふ。關係はある意味に於て關係を構成する項の性質に基礎を有する。しかし項の性質と云ふものも全體をまつて定まるものと見なければならないのであるから(この事は後に論ずる)結局は全體そのものに於て成立すると云はなければならない。「於て」と云ふのは明瞭を缺ぐと云はれるであらうがしばらくそのままにしておく。或は次の樣に云ふことも出來ると思ふ。大小の關係に立つものは量を有する項でなければならない。この限りに於て大小の關係は項の性質に基くと云ひ得る。然し他方から云へば項が量を有すると云ふことはすでに關係を豫定してゐるとも云へる。かように關係と項とを對立せしめて一を他に基けようとしたのでは滿足な解決は得らる可くもない。そこで私は全體と云ふものを考へるのである。二つの項が大小の關係に立つと云ふことは實は二項を大小の關係に於て統一する全體が

あると云ふことなのである。大小の關係はこの全體の Seinsweise である。しかしかく云つても未だ透徹した事相を現はし得てはゐないであらう。それは全體と部分との關係が明瞭にされてないからである。この點には後に觸れようと思ふ。私はここで上述の如き考を最よく現はせるものとしてリップスの「心理學的研究」の一節に思ひ及ばずにはゐられない。リップスは個體(アインヂエルネ)と統一とを論じて云ふ。「關係はそれ自身として考へられた個體に屬するのではない。それはあるものと他のものとが zusammengenommen されたるものに屬する、この zusammengenommen と云ふことは必ずしも我々の精神の作用によると考ふるを要しない。それは意識と獨立な實在界に存する Zusammengenommensein と考へていい。然し何れにしてもこれは一の統一を豫想する。かかる統一の基礎は凡ての客觀的關係の Basis として豫定されてある。然し他面に於て關係は凡て個物相互の關係であつてその限りに於て個物に屬する。この兩者を綜合して關係は個物に屬する、然しそれは個物としての個物にではなくそれが統一の中にある限りに於てであると云ひ得る。」(Th. Lipps, Die physikalische Beziehungen und die Einheit der Dinge. Psychologische Untersuchungen 1. S. 580 ff.)音と音との間の關係は凡ての關係と同樣あるものの規定(ベスティムング)である、卽ち ein Akzidenzielles である。この

關係はそれ自身獨立なものではなく他のあるものに屬(アンヘフテン)するものである。それは一の性質(クワリテート)である。然し音と音との間の關係は個々音の性質ではなく全體の性質である。それはGestaltoder Gesamtqualität と云ひ得る。之と同樣に空間的關係も個々物の規定ではなくそれ等より成る全體の規定である。然しこの場合に於ても全體は個々物の和(ズムメ)以上のもの、この和に對してある新たなもの、獨異なるものである。Aber sie ist nicht etwas neben dem Einzelnen, das in dasselbe eingeht, sie ist eben das Ganze, die sie ist das Einzelne als in eine Einheit beschlossen und zusammengenommen, wobei die Einheit vorausgesetzt ist. Und die weise des Zusammenseins in der Einheit ist die Beziehung. (opt, cit. S. 583-4)我々は項が全體に統一さるる限りに於て關係の基礎となると云ふことを主張するのであつて、あるタームがある關係に入ることそのことはそれの內面的性質に基く、もし然らずとすればそれは何等の理由(リーズン)なくして關係に入るもの、卽ちその關係は隨意的であると云ふことを論據として關係內面說を說かうと云ふのではない。かやうなラッセルの所謂充足理由の原理は直接我々の論證を支持するものではない。ただ、全體に統一さるる限りに於てと云ふ制限はよほど吟味を要する。このことは要素或は部分が何等かの意味で全體に先行することを意味するものと解せられる。ここに外面的

關係の說の乘ず可き隙があるやうである。それは部分がかかる統一と獨立し得ることを認めてゐると云はれるかも知れない。それは所謂全體が終極のものでない限り許さなければならないのである。音はメロディを作る限りに於ては、その全體によつて規定される關係に立ち之と離れては無意義である。然し音は單にメロディの構成要素たるに盡きるものではない。他の種々の方面に於ける關係を通じて種々の全體に入りこみ得ると考へなければならない。いかにもその通りである。我々の全體が凡てのものの、あり得可き凡ての性質を盡し得るものでない限り全體は之を組成するものに對して後天的第二次的と考へなければならない。我々もまた判斷の對象がある意味で假定的なものであることは拒まうとは思はない。それはある「見方」に於けるものの規定である。然し私はここに考慮を要する點があることを見逃してはならないと思ふ。ものがある「意味」を有することは一の「見方」を假定するとしても、この意味內容そのものは全然判斷の對象なる全體の統一をまつて生じこれを離れてはあり得ないものであると云ふことである。これが含蓄的にはあるものの「中」に存すると云ふような議論はよほど警戒を要すると思ふ。この「限りに於て」と云ふことをいかに見る可きか　を決定する準備として一通り外面的關係

の說そのものの主張を、タームの不變性と云ふ點に關して吟味して見よう。

絕對に不變なるものは少くとも具體的經驗そのものの示す所ではないと云ふことは拒み得ないであらう。具體的經驗に於て與へらるる對象は常に統一的全體である。而してその全體そのものは一々が異質的のものであることも認められるであらう。ただかかる經驗はその構成要素として不變なる無數のターム及關係を含む。複合的全體は異質的であつても之を構成する要素そのものは不變なるものでなければならない。異るのはただその配合であると云ふのであらう。「如何なる關係もその項を變ぜない。ABの間に成立する關係はどこまでもABの間に成立するのであつて、この關係がABを變化せしめると云ふのは實はそれが別な項CDの間に成立すると云ふことなのである。」「所謂變化とはある名辭がある時に於て特定の名辭に特定の關係を有し他の時に之を有せざることである、かかる關係を時によつて有し又有せざる名辭そのものは不變でなければならない。(Russell, Principles. p. 448)。不變にして關係及複合體と獨立なる實有(エンチティ)を我々に示すものは分析である。外面的關係の說は分析の妥當性を哲學的に代辯するものと云ひ得る。不變的なるタームとして最も明瞭なるものは何等の複合性を含まない單一體である。外面的關

係の說と關聯する新實在論を主張する人々が、實在として終局的なるものを複合的なものでなく單一體に求めるのはこの事を證してゐると思ふ。分折は falsification であると云ふ非難に對してそれは分析の本質を誤解せるものである、分析は單に部分を現はすのみならずこれ等の部分を相關係せしめて全體に組織する關係をも現はすことを忘れたものであると云ふ。分析の及ばざる部分が殘されると云ふ意味でそれが不完全であるとは云ひ得るがそれが爲めに分析が虛構的であると云ふことにはならない。何となれば the whole *is* the parts *and* their properties *and* the relations relating the parts *and* the possibly specific properties of the whole. であるからである、(E. Spaulding, A Defense of Analysis, New Realism, p. 161.)

これ等の說は全體とその部分或は要素との關係の特殊な見解に基くのである。我々は之に對して全體は果してかく分析し得るものであるか。分析後に現はれる關係は眞に要素を關係せしめて全體に組織し得るものであるか又分析後の要素がかかる作用を容れ得るものであるか。更にそこに何等かの全體が成立し得たとしてもそれは原の全體そのものであるか。と問はなければならないのである。外面的關係の說に對する眞の批評はこれ等の疑問の解決の如何によつてのみ成立し得

るものと思ふ。ここにはこれ等の問題の全般に立入らうとするのではない。所謂命題の統一と云ふ見地からこれ等の問題を考へて行かうと云ふのである、それによつて判斷の對象の構成を考へる上にある足場を得ることが出來れば足りるのである。

四

判斷の對象としての命題が一の全體であること、而も單なる部分の集合とは異なる統一としての全體と考へなければならないことを前に述べた。ここに今少しくこの全體の性質、それの部分との關係及所謂部分の獨立性と云ふことにどれだけの根據があるかを考へて見よう。

命題を單なる集合と區別するものはその構成要素にあるのでなくただ「ある仕方に於て關係せられてゐること」に外ならないと云ふ說は他方に於てかかる仕方に關係せられると云ふことは要素そのものに本質的ではないと云ふ考を豫想するのである。關係の事實にこの兩方面を認めることは全體と部分との關係のある見方の根據となつてゐるのである。これによつて全體に對する部分の獨立と云ふことが云ひ得るのである。ペリーなどの說が之に當つてゐる、彼によれば普通ある種の(有

機的と云はるる)全體に於ては部分は全體に依存(デペンド)し全體によつてそれの意味を得るのみならず其特殊的性質をも決定せられると考へられてゐるがこれは疑はしい。部分が全體に依存するのはその部分が全體の成員たることを條件としてのことである。彼は直角三角形とその斜邊との關係を引いて說明してゐる。要するにある要素が一定の全體に屬する限りに於てそれはその全體の部分としての諸關係を享有するのである。然しこの事は要素そのものがこの全體の成員(メンバーシップ)たることに依存し、從つてカテゴリカル(カテゴリカル)に全體に依存すると云ふことではない。ただ部分が全體の成員たる割前(ロール)に當ると云ふ限りに於て部分たるの役目を演ずると云ふことに過ぎないのである。(Perry, A Realistic Theory of Independence, New Realism p. 108) 名辭の關係よりの獨立性と云ふことは部分と全體との關係に就いてこの見解を承認した時に初めて意義を有するのであると思ふ。

命題とその要素との關係にかかる見解が適用し得るであらうか。

この見解が命題と云ふ全體に適用し得るためには命題の要素としての名辭はそれが現在部分として組成せる全體を離れて意義を有し得るものでなければならない。ある命題中の名辭がそのコンテキストを離れては意味を有しないとすれば、そ

の名辭は單に條件的にこの命題の部分たる役目を演ずるもので本來はこの命題の部分たることと無關係であるとは云ひ得ないのである。このことが命題の部分に就いて眞であると云ふことが示し得れば命題の要素は命題なる全體そのものに依存すると云ふことが明らかにせられるわけである。「AはBより大なり」と云ふ時、Aは」と云ふのは既に全體に對する關係を含む。「Bより」も同樣である。命題に於ては全體の豫定なくしては我々は一歩も踏み出だし得ないと考へられる。しかしこれだけのことによつて命題の要素は全體に依存することを論證しようと云ふのは無効である、それは部分の條件的依存にすぎないと云ひ得るであらう。然し「AはBより大なり」と云ふ命題の要素としてのAがこの命題の統一を離れてあり得ると云ふのは命題の部分と云ふものの本質を明かにせざるに基くのではないであらうか。それはこの命題に於いて現はれるAはAなる對象の一面にすぎないAは尙他の諸性質を有し得ると云ふ假定に基くのである。一面的であると云ふのはそれがAそのものでなくAの eine Gegebenheitsweise(1) であると云ふこと或はAの一種の把捉(2)內容であると云ふことであらう。卽ちAそのものでなくAの一種の意味であると云ふことなのである。(1)はフレーゲの意味の定義。曉の明星と宵の明星とは對象的に

は同一であるが與へられる仕方に於て異つてゐる、それが意味である。Frege, über Sinn und Bedeutung, Zeitschrift für Phil. und phil. Kritik. 100 Band (2)は大體フッセルの意味の考である。Log. unt. II. 2te Aufl. S. 415.f. Ideen. S. 272. Gegenstand im Wie seines Bestimmtheit.) この意味の概念が是認せられるとすれば「AはBより大なり」と云ふ時のAはAの一面にすぎないからAそのものではなく條件的規定で云ふのは命題を考へる場合に許す可らざる見方の混同によるのであると云ふことが示され得ると思ふ。命題の内容を考へるに當つては「意味」が最後のものである。Bより大なりと云ふ以外のAの性質はこの命題そのものから云へばAの他の一面ではなく直に non A でなければならない。所謂命題は「意味」ではなく對象であると云ふ非難は單なる誤解にすぎない。また命題をかやうに考へることはそれをあまりに抽象的なものとすると云ふ非難に對しては凡ての聯關から切り離した命題そのものを考へてゐるのであると云ふことを斷る外はない。要するに命題の要素としての名辭はそれが命題そのものに於て有する性質以外の何物でもないと云ひたいのである。そしてかかるものとしてはそれは命題の全體に依存しそれによつてのみ意義を有するものでなければならない。命題の要素としてのタームは自立性を有しない。その命題から引離

されゝ時それは他の關係に於て得たる他の意味を有するものとなつてゐるのである。從來命題の部分として所謂關係的なる要素、即ち前置詞、接續詞、動詞、等によつて現はされる部分の依他性（ウンセルブステンディヒカイト）と云ふことは普通に認められそれ等のものは獨立した意味をなすためには他のものによつて補はれなければならない、或はそれ自身として解せられるのは、全然變つた意味に於てであるとされてゐる。例へば孤立した und は單に我々によく知られた分詞であるとして解せられるか或は漠然 A und B の如く補つて解するのである。(Husserl, Log. Unt, II. S. 316) 一般に他の內容に依存するものは關係の如き高次的對象に限ると考へられてゐる。然し私はこゝに述べた樣な理由で所謂 inferius そのものも全體の部分として他をまつてのみ成立し得るものと考へる。而して「全體の部分として」と云ふことはこゝでは條件的ではなくして本質的な意味を有するのである。全體とか複合體とかに要素に還元し得ざる獨立な意義を認める一派の心理學に於てもこの點に於てなほ從來の心理學の羈絆を脫せないところがあることをカッシラーも指摘してゐる。「スーペリウスは必然にインフェリオラを豫定するが後者は自立的と考へられてゐる。それ等の上に成立する關係は第二次的（ナハトレグリッヒ）な結果の如く見える。それの有無は要素そのものの成立には何の寄

與をもなさないと考へられてゐる。然しこの單一的なるものの自立性と云ふことも支持し難いものである。內容の上下の序列は嚴密な相關性(コレラティヴィテート)によつて代られなければならない。」Wie die Beziehung des Hinblicks auf die Elemente bedarf, so bedürfen diese nicht minder des Hinblicks auf eine Form des Beziehung, in der allein sie feste und konstante Bedeutung erlangen Jede begriffliche Aussage über ein" Inferius "betrachtet dies bereits unter dem Gesichtspunkt irgend einer Relation, der wir den betreffenden Inhalt zuordnen. Die „Fundamente "sind stets nur als Fundamente möglicher Relation bestimm bar und bestimmt. (E. Cassirer, Substanzbegriff und Funktionsbegriff. S. 451)　命題の部分としての名辭も關係も特殊な相關關係によつて成立するものである。從つてかかる關係を離れて分離的獨立性を有し得るものではない。この相關關係と云ふのもその關係の前に名辭なり關係なりがあつて、ある時に於て結合して全體を構成するのではない。かくの如く考へては名辭と關係との間に更に第二、第三の關係が要せられ無限の逆展が避け難く、而も命題の統一は理解し得ざるものとならざるを得ないのである。部分があり之を關係せしむる關係があると云ふのは統一的全體が體制(ゲシュリーデルト)を有すると云ふことに外ならない。意味的全體がアーティキュレートされたるものであると云ふことなのである。判斷對象は如何なる意

味に於ても部分の合成ではなく、反つて部分は全體の統一に於て生れるものと云はなければならない。判斷の對象の構成を示すのにA、B、Rの如き固定したるシムボルを用ふることはそれ等が元來ばらばらのもので單なる寄せ集めであるかの如き觀を與へるのであるが直接對象そのものに對したときかかる分離は決して認め得ないのである。以上の考察に於て極めて不完全ながら私が最初判斷對象の構成に關する第一の立場と云つたものは判斷對象の本質を明らかにするものでないことが示されたと信ずる。自分としては理解しにくい思想をあまりに勝手に取扱つたと云ふ非難に對して辨解の辭を知らない。近代の科學に於ける分析と云ふものの意義を考へるとそれを背景とした見解の眞の理解なり批評なりは數學其他の科學の根元概念そのものに立入つての議論によつてのみ可能であらう。私はある學說を批評しようとしたのではなく事象そのものの理解を求めたのみである。

判斷の對象が一の統一的全體と考へなければならないとすればそれを命題と呼ぶのはあまり適當ではない。それは恐らく判斷の對象を意識のタームに於て考へることに對する反動的な意味を有するのであらう。然しその結果は思想を言語的表出の層に於てとらへる外なくなり、意識作用に於て最も理解し易い統一性の見地が失はれて感覺的なるものの特性であるディスクリヨトネスが知らず知らず移入せられるに至つたと云つてよいであらう。また對象を客觀的とか事態Sachverhaltとか

を呼のは客觀的は客觀の上に立ち事態はザッヘの上に立つように、高次的なものを第二次的のものと見えしめる傾きがあらう。私は判斷對象は意味と呼ぶのが最も適當ではないかと思ふ。意味に於ては常に全體の統一が根本的のものである。のみならず意味の概念は判斷對象の形而上學的地位とも云ふ可きものを最も明かに現はすやうに思ふ。美的意味と云ふような語法に對して論理的意味と云ふことも出來る。判斷對象の統一は論理的統一である。判斷の對象としての意味を他の價値的對象と限界するものは意味の論理性である。

リッケルトは、文章の論理的意味（シン）と個々の語義（ベドイウング）とを全體と部分との關係にあるものと見てはならない。眞理たり得るのは論理的意味であつて語義ではない。意味はその眞理性より見て絶對に分解す可らざる統一であつて認識の對象となるのはこの全體である。全體をその本質に於て理解し得た時始めて全體と部分との關係が問はれるのであつてこの關係なしには部分は論理的には無意味であると云つてゐる（Zwei Wege. V）これは一見上の說と矛盾する如くであるが決してそうではなく我々の示さうとしたことは正のこの點であることは更めて斷はるまでもないことと思ふ。私の部分と云つたものが命題を構成せる個々の語の意味でないことは明かであらう。語義は命題の全體的統一と無關係に理解され得る固定的（リジッド）なものであ

る。かようなものの集合によつて命題が成立するのではない。ラッセルなどの見解の難點はかような固定的なディスクリートなタームの間にこれ又固定的な關係をおいて命題を考へようとしたことに存するのである。命題の部分としてのタームはそれが他の聯關に於て有する意味を放棄して新たに命題全體の統一からそれ自身の意味を得て來なければならないと云ふことが我々の達した結論なのである。かやうな「部分」の意味は全體と分離し得るものではなくそこに分解と云ふことを考へるのは無意義である。そしてかような意味での「部分」は全體の統一のうちにあるものとして全體と同じく論理的であるのである。私は上來判斷の對象を眞僞の見地から獨立に考察して來たのであるがここにほんの一瞥的にこの問題に觸れて見たい。

「シーザーは死せり」と云ふのは眞理であるが「シーザーの死」は眞でも僞でもない。兩者は如何なる差異によつて一は眞僞の性質を有し他は之を有しないのであるか。まづこれは判斷と假定(アンナーメ)との差異であると見られる。然しこれはこの問題の單に心理的なアスペクトであると考へられる。かような心理的差別に應じて對象的にも何等かの差別があるのではあるまいか。ラッセルはこの差別の論理的な方面を現はすものとして「論理的意味での斷定(アッサーション)」の概念を想定してゐる。彼によれば斷定とは眞

なる命題のみに屬し之を僞なる命題と區別する性質である。(Principles p. 35 49. Appedix A. p. 502 Meinong's Theory p. 512f.) 斷定された命題に於てはそれに含まれる關係は單なる關係ではなく現實に關係せしむる關係 a relation actually relating であると考へるのであるが、此二樣の關係の區別が如何なるものであるかは辨じ得いと云つてゐる。(p. 49. 100. 140.) もし大膽な憶見が許されるとするならば私はこの事實は意味的體系の自己完結、或は統一の內在性と云ふことによつて說明し得るのではないかと云ひたいのである。Dass-Satz よつて現はさるる內容は完成せざるもの、統一を自己以外に求むるものである。「シーザーは死せり」と云ふことは一の完成せる意味的全體と考へ得る。之に反して「シーザーの死」と云ふのは更に包括的な全體に於てのみ完成し得る意味である。「シーザーの死せることは大事件なり」の如くである。之を主觀の方面より云へば判斷に於てはあることが主張(ベハウプテン)される。主張とは意味の自己斷定であると考へ得るのである。之に反して假定に於ては判斷に於て完結したるものとして把捉されたものが題目(テーマ)に變ずるのである。「黃金の山はあり」と云ふ判斷內容に對して「黃金の山のあることは」の形式をとるのである。判斷に於てのみ眞僞の別があり得ると云ふのはそれの對象は一の完結せる意味であるからである。否むしろ

判斷作用に於て自己を完結するが故ではあるまいか。自らの中に統一を有する完結せる意味のみが眞又は僞であり得ると云ふことは自分には殆んど自明のこととして現はれて來る。眞僞と云ふことを包括的全體に對する關係と考へればこのことは最明瞭である。僞と云ふこと或は主觀的に誤と云ふことは一の完結す可からざる意味の自己完結に於て成立する、他方より云へば本來一のテーマとして自己以上の立場に於て統一を求む可き意味の vermeinte Immanenz が誤謬である。ポザンケットの誤謬の說明の如きは同樣の考に基くと思ふ。The fundamental character of Error is always the assertion of a merely possible alternative to be the alternative true of reality, i. e. the assertion of something conditionally true, without regard to its condition. (Logic. p. 283.) 眞理の場合は如何に見る可きであらうか、眞なる意味とは完結す可くして完結した意味である。それの自己完結がただに自己の完結に止まらず自己以上のあるものの(之を意味に對する對象と云つてもいい)完結と結びつくのであるとは云ひ得ないであらうか。それの統一は單に自己の統一ではなく自己を含めるある者の統一の承認である。單なる自己の主張ではなく對象に於ける自己主張である。かやうな考よりすれば意味が自らを完結することは眞である所以であると共に僞の成立する所以でもあ

る。判斷すると云ふことは眞を得るか誤まるかの岐路を踏みきつて一歩を進めることである。之に對して假定は眞を得る途でないと共に誤ともならぬ。眞理以前であると共に批判的態度であるとも云へよう。黄金の山はありと信ずるに對して之を一の問題とする態度である。

意味の自己完結と云ふことは今のところ妙に私の心を離れない思想ではあるがここではただそれを憶說としてしるしておく。他日判斷の作用について論ずることがあればこの點に觸れて見たいと思ふ。その際この一見突飛な考を今少し嚴密な論理によつて跡づけることも出來やうかと思ふ。肯定否定の作用がややもすれば對象そのに外的なものと考へられ易い。それもこの概念によつてもつと對象に內面的なものとして示すことも出來るのではないかと思ふ。この點に關してラッセルの所謂アクテュアリティ、及アッサーションと云ふことは何かの暗示を與へるやうにも思はれる。

私は既に知らず知らず自己と云ふ語を用ひた、意味的全體の完結とか統一の內在とか云ふ概念と自己又は個性と云ふ概念とは必然に相求めるもののやうである。私のここに問題としたことは論理の世界に於ける個性と全體との問題に歸着する

やうに思ふ。

以上によつて判斷の對象を一の統一體として理解するためにはどうしても全體として考へなければならないことを說いた。然し個々の判斷の對象が夫々自らの中に局限せられた全體と考へることは出來ない。判斷は判斷と結合して推論の連鎖を作る、推論の可能であると云ふ事は判斷對象としての全體が孤立的なものでなく更に包括的な全體に連つてゐることを示すのである。普遍と云ふことについては篇中で之に觸れることを避けたが普遍と特殊との關係も推論の體系に於てその全き意味を展開し來るのではないかと思ふ。(完)